森林工芸館の あれ これ

no.13
4
2021

オケクラフトの誕生にとって
最も重要な年となる一九八三年
「生みの親」である 秋岡芳夫さんが
新たなまちづくりへの一歩を説き
「育ての親」である 時松辰夫さんが
技術を伝え、その先へと導きました
真剣な思いに共感した思いは
さらに広がり、大きな思いへと育っていきます
この年の十月
「オケクラフト」は誕生しました
置戸町の新たな挑戦となった一年
その歴史を少し　お伝えしていきます

NO.2 オケクラフトの歴史 since.1983

オケクラフトの誕生

人と、木と、おけと

OKE CRAFT オケクラフト

1983 年

2月　第５回町民憲章推進大会講師に 故秋岡芳夫さん
「木と暮らしのデザイン」と題して講演
→講演後、町の青年たちとの懇談会の中で、「置戸の資源を生かすのに木工ろくろ技術を導入し、北国から新たな生活文化を発信しては」と提案。
▶技術指導の講師として 故 時松辰夫さんを紹介

5月　木工ろくろの技術指導講座開催
→秋岡さんの紹介により、当時、岩手県大野村（現 洋野町）で東北農山村における裏作工芸の実践指導に当たっていた、東北工業大学工業意匠学科第三生産技術研究室と連絡を取り、時松辰夫さんの来町が実現。
▶置戸町で初めての木工ろくろ講座を開催

8月　森林文化研究会の発足
→時松先生が毎月定期的に置戸を訪れ、試作指導するのにあわせて、町内の様々な職業や年齢の人たちが集まり、全国の事例や情報を聞き、町の将来を語り合う中で、森林を背景とした置戸の生活や生産、暮らしそのものを見つめ直そうという目的で結成された。

10月　オケクラフトの誕生 / オケクラフトの命名
→秋岡さんの紹介により指導に入った時松先生は、エゾマツなど置戸の基本財産である森林資源に着目した工芸指導に取り組み、指導開始から２か月でお椀と丼、アイスクリーム皿、置戸で唯一曲輪の伝統技術を伝承していた奥原博嘉氏との共同で曲桶の試作を仕上げた。

11月　オケクラフト 東京でのデビュー
→オケクラフトの製作を始めて、わずか数ヶ月後の 11 月。秋岡さんは置戸で製作されたオケクラフトを並べ、東京日本橋高島屋で「北の自然から生まれた木の器 オケクラフト展」を開催した。
※主体となったのが森林文化研究会

pick up

時松辰夫
一九三七年
大分県九重町生まれ
二〇二一年
八十三歳で逝去
◎家具職人、工芸試験所等を経て、東北工業大学へ。そこで秋岡さんと出会い、以後秋岡さんの片腕として活躍。様々な受賞歴を持つ。

時松辰夫さん

技術講座
時松先生の指導により、初めて開催された木工ろくろの技術講座では、町民にとって身近すぎて、その価値に気付かなかったエゾマツやトドマツが、素晴らしい器に生まれ変わるのを見て参加者から驚きの声があがった。

時松先生による木工ろくろ講座

森林文化研究会
主な活動目的のひとつとして、東京日本橋高島屋で行われるオケクラフト展の主体として作られたが、オケクラフトを作り販売するだけではなく、森を見て生活を考え、工芸的な目で地域を見つめ直すという、もう一つの大きな役割もあった。

置戸町森林文化研究会

オケクラフト完成報告

オケクラフト命名
時松先生の指導開始から二ヶ月、置戸町で製作されたエゾマツを素材としたクラフトが秋岡さんによって、【オケクラフト】と名付けられ、「芸術新潮」十月号で「白い器オケクラフト」として紹介された。

日本橋高島屋 展示会の様子